

## 【寄稿】 奥田日記研究集会の件

福留, 久大  
九州大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/2344794>

---

出版情報 : 奥田八二日記研究会会報. 3, pp.323-325, 2019-09-30. 奥田八二日記研究会(九州大学大学文  
書館内)  
バージョン :  
権利関係 :

【寄稿】

## 奥田日記研究集会の件

福留久大

2016年3月25日14時より、奥田八二日記研究会の第一回を大学文書館で開きました。この勉強会は、文書館の折田悦郎さんと奥田知事の秘書を務めた森山英明さんが意気投合するなかから立ち上がり、私に会長として参加するように働きかけがありました。私は、悪いことではないと思い、承諾しました。が、他に優先すべき重要な学業を抱えていますので、積極的と言うよりは受け身的な姿勢での承諾でした。しかし、25日の会合を経験して積極的に取り組むやりがいのある仕事だと認識を改めました。

最初、折田さんから話があった時、次のような趣旨だと受け取りました。福岡の政治史や労働運動史の研究を続けている研究者を支援して、九大の現代史、福岡の現代史の研究者として独り立ちさせたい、そのために奥田日記が恰好の研究対象に成り得る。それが一つ。いま一つは、一時強かった「革新県政」は、良く言えば「再配分政策に傾斜している」、悪く言えば（悪く言われることがほとんどなのですが）「ばら撒き政策ばかり」というイメージを払拭したい、そのために奥田県政を客観的に再検討してみたい、その手掛かりとして奥田日記を読み解きたい、という気持ち。

折田さんのこういう気持ちに私は賛同しました。受動的で良ければ、可能な範囲で協力しようと思いました。それについては、折田さんの思いにピッタリと適合した論文を、私の若い友人、行政学専攻、神戸大学大学院国際協力研究科教授の松並潤さんが、関西大学勤務中の2004年に執筆していることも念頭にありました。<「革新」自治体の財政支出>と題する論文です（関西大学法学研究所『大都市圏における選挙・政党・政策』77～91頁）。

この論文で、松並さんは、地方財政の分析を通じて、奥田知事が「福岡県における生活保護費と失業対策費」のなかで「本来の福祉目的からずれた支出となって」しまった部分の削減に努め、「他の福祉目的の歳出（児童福祉費および老人福祉費）を増加させることに成功した」ことを明らかにしています。こうして奥田県政時代には「再分配政策支出の割合を減じた」というのが、松並論文の結論です。

先だって、奥田知事二期目の選挙に当時の中曽根首相に担がれて対立候補として出馬した田中健蔵氏の葬儀が行われました。その場で麻生太郎（元首相）氏が、奥田さんが滅茶苦茶にした県政を立て直そうとしたのが田中氏だった、と挨拶したそうです。こういう嘘がまかり通るほどに奥田県政の実情は知られていないのです。

2015年12月26日、奥田知事選挙を裏方として支えた岩崎隆次郎さんに山田・篠原の両

君を引き合わせる会食の場が設けられました。その際に、松並論文を山田君篠原君に紹介し、財政統計を用いて奥田県政の特質を解明することを勧めておきました。両君には財政統計による県政分析の手法は大層新鮮に思えたようで、大いに興味を示して呉れました。

3月25日の第一回の勉強会は、研究会の事務局長を務める折田教授の司会で、14時に始まって17時半までつづきました。私は、経済学部の卒業祝賀会に出席の約束があったので、15時半には退席せざるを得ませんでした。その時点まででも、興味津々の議論を拝聴できました。

篠原君が、松並論文に倣って生活保護費や失業対策費の割合を示すグラフを近年の分まで作ってきました。奥田県政から麻生県政に変わると生活保護費や失業対策費の割合が低下せずに増加する傾向が生まれていました。非常に面白かったのは、当時県職員だった人々、森山さんのほか、橋口甚之輔（奥田初当選の頃、自治労福岡地本書記長）、橋本洸（奥田知事秘書）という方々が、生活保護費の不正受給部分の削減過程を具体的に話して呉れたことでした。現場の社会福祉事務所からケースワーカーの増員要求、奥田知事の決断、主管課長の意識の変化、社会福祉現場の士気の高揚など、数値の減少の背後の事情が判明しました。山田君篠原君は、より詳しいインタビューや資料収集を重ねて、松並論文に具体性を加味した立派な論文を仕上げるに違いないと思うことでした。

1月21日の葦水忌に際して、昨年は徳本正彦先生に、今年は河野正輝さんに、それぞれに気持ちのこもった奥田先生の思い出を語っていただきました。森山英明さんと、来年はどうしようかと思案し相談していたのですが、奥田県政の特質の一端を巡る山田＝篠原論文が出来れば、その要点を披露して貰うのが、何よりの供養になるのでは、と森山さんと話すことでした。

私の退席後も活発な議論が交わされた由、伺っています。そのなかで、主要な論題として四点が挙げられたとのこと。①1967年の社会主義協会の分裂の経緯。これについては、奥田先生周辺の方々が経緯について討論されたことがあり、その際の録音テープを河野さんが奥田先生から託されていたそうです。河野さんから大学文書館に渡され、いまテープ起こしの作業が行われています。②学生部長・教養部長時代の奥田先生の事績。③奥田県政の諸相。④最晩年に病床の奥田さんが、「新しい旗を立てよ」と何人もの人に呼び掛けている、その新しい旗とは具体的にはどういうものか。

当面、上のような論点に即して、2カ月に1回の割合で集まって、奥田日記を読みつつ、九大と福岡の現代史を追究したい、というのがこの会の趣旨だと思います。そういう論点について、できるだけ多様な立場の方々の参加を得つつ、検討を進めてゆきたいと考えています。

私が受け身的姿勢から転じて積極的に楽しみだと思えるに至った事情については、この辺で筆を措くことにします。

(2016年4月1日)

以上を書き記してから、3年半が経過しようとしている。その間、ほぼ2か月に1回の見当で、研究会（と言うよりは、勉強会、談話会と言うのがふさわしいかも知れない）を箱崎の大学文書館で重ねてきた。篠原新君が広島修道大学法学部准教授に、山田良介君が九州国際大学現代ビジネス学部准教授に、それぞれ転勤するという変化もあった。研究会の談話会と並行して、会の内外の人々の手で奥田日記の翻刻も進行している。その翻刻の発表を中心に「奥田八二日記研究会報」の発刊に漕ぎつけることも出来た。第1号210頁が2018年3月に、第2号319頁が2019年3月に、電子書籍として刊行され、第3号が間もなく陽の目を見ようとしている。この日記翻刻の校訂と会報の編集については、藤岡健太郎・文書館准教授の精魂込めた努力が特筆されねばならない。藤岡氏の精力的な作業推進に牽引される形で、会員相互の責務と役割の分担が進行している。研究会を代表して深く敬意を表する次第である。

（2019年9月13日）